

新型コロナウイルスの影響により、やむなく変更・休診になる
こともあります。事前にお問合せください。

犬の甲状腺機能低下症

最近、中年齢になってきたうちのわんちゃん、昔と比べて何となく元気がなくなってきたような気がする。毛もぼさぼさで、薄くなってきた。年を取ってきたのかもしれない。それは実は「老い」ではなく甲状腺機能低下症という病気かもしれません。

今回は症状がゆっくり進み、老いと勘違いしやすい病気、甲状腺機能低下症についてお話します。

甲状腺は喉の部分にあり、全身の代謝（エネルギーを作る働き）を活性化させるホルモンを分泌する臓器です。このホルモンにより、全身の細胞の入れ替わりや、細胞の中でのエネルギー産生を調節しています。

その甲状腺が何らかの原因で障害を受けて分泌するホルモンの量が少なくなる病気を、甲状腺機能低下症といいます。甲状腺から分泌されるホルモンの量が減少すると、全身の代謝が低下し、体に様々な症状が現れます。

よく発症する年齢は2歳～6歳と言われ、比較的若い犬でも発症することがあります。

<原因>

甲状腺の機能が低下する原因は、1. 免疫異常によって甲状腺が炎症を起こしてしまう場合と、2. 甲状腺が萎縮（小さくなって機能しなくなる）してしまう場合があります。どちらも、なぜそのようになるかはわかっておらず、そのため予防することができません。

<症状>

具体的な症状は、

- ・元気消失、無気力、活動性低下、体重増加（食事量を減らしても太っていく）
- ・痒みを伴わない脱毛、尾の脱毛、毛のごわつき
- ・皮膚：脂っぽい、フケがでる、炎症、むくみ
- ・便秘や下痢
- ・低体温や徐脈（心拍がゆっくりになる）

このように様々な症状が全身で見られます。

<診断方法>

甲状腺機能低下症は、体の症状と血液検査の結果から総合的に診断します。血液検査では貧血、高脂血症、高コレステロール血症、甲状腺ホルモン値の低下、甲状腺を刺激するホルモン値の上昇などがみられます。

<治療>

症状を改善するために、合成甲状腺ホルモン薬を内服します。薬の量は、病気の状態と個体により異なります。最初は標準的な薬の量を投薬し、その後、体の中のホルモン量が適正であるか判断します。定期的に、体の状態の診察、血液検査によるホルモン量を測定します。

低下した甲状腺の機能は回復することは少ないと言われ、生涯にわたって甲状腺ホルモン製剤を内服することになりますが、症状が落ち着けば普通の生活を送ることができます。

甲状腺機能低下症はなるべく早く発見し、治療を始めることが大切です。また、症状がゆっくり進むため日々一緒に過ごしているご家族のみなさんでも気がつかないケースもありますので、中年齢以降に健康診断をするときには、甲状腺ホルモンを測定する検査を行うことをお勧めいたします。

検査のご希望やご不明な点などありましたら、当院へお尋ねください。

参考文献

犬と猫の治療ガイド（interzoo）

スモールアニマル・インターナルメディスン（interzoo）